

チワン語龍茗方言の音韻体系

黄海萍

0. はじめに

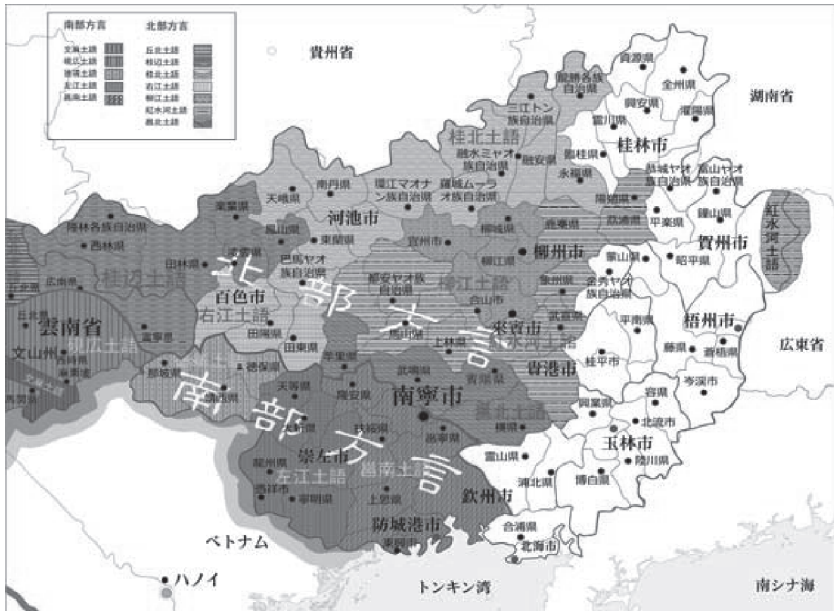
中国南部に居住する少数民族チワン族^①の言語は多様性に富む。そしてその地域変種の多くは十分に記述されていない。本論文が分析対象とするチワン語龍茗方言(以下、龍茗方言)もこれまで一度も記述されたことがないチワン語の地域変種のひとつである。本論文は、龍茗方言の音韻体系を記述することを目的としたものである。

本論文が言うところの龍茗方言とは、広西チワン族自治区(以下、広西)崇左市天等県龍茗鎮の逐伏屯で話されているチワン語の変種を指す。韋・覃(1980)によると、チワン語は北部方言と南部方言に大別され、さらに北部方言は7つ、南部方言は5つの方言にそれぞれ下位分類される^②(地図1)。南部方言の下位方言のひとつに左江方言がある。左江方言はさらにいくつかの下位方言に分類されるが、そのひとつに天等方言がある。龍茗方言は天等方言の中の1つである。

本論文では筆者の母語である龍茗方言を筆者の内省に基づいて分析し記述する。特に断りがない限り、分析の対象とするデータは筆者の内省に基づくものである。分析の対象は単音節語に限定する。

本論文の構成は次の通りである。

第1節では龍茗方言の使用地域・使用人口やチワン語の系統、本論文に関わる先行研究について紹介する。次に、第2節では研究方法について述べる。第3節では子音音素、母音体系及び音節構造を記述する。第4節では音節構成素の声調を記述する。



地図1 チワン語分布概略地図(王鈞等1984)により、筆者が作成したものである。

1. 背景

1.1 使用地域・使用人口

天等県は広西の西南部に位置する。人口は44万人余りであり、そのおよそ98.7%がチワン族である。龍茗鎮は天等県の西南部に位置する(地図2)。龍茗鎮の人口は約2万3千人である⁽³⁾。龍茗鎮の総人口に対するチワン族の割合を示すデータは公表されていないが、天等県の総人口に対するチワン族の割合を参考にすると、少なくとも98.7%に達すると思われる。逐仗屯は龍茗鎮の東南部に位置し、鎮都まで約3キロである。

1.2 系統・先行研究

チワン語は、中国語学の枠組みにおいては「漢蔵語系壮侗語族壮傣語支」に属する言語とされる。すなわち、シナ・チベット語族(漢蔵語系)チワン・トン語派(壮侗語族)チワン・タイ語支(壮傣語支)の一言語とされている。一方、多くのタイ・カダイ(Tai-Kadai)語族の研究者は、チワン語をシナ・チベット語族とは別系統をなすタイ・カダイ語族に分類し、



地図2 天平等県地図（天平等県志1991）の一般地図を下絵に筆者が作成したものである。

タイ・カダイ語族中のタイ諸語(Tai)に属する言語であると考えている。いずれの説においても、チワン語がこのグループ(すなわちチワン・トン語派あるいはタイ・カダイ語族)に属するという結論は共通している。

龍茗方言はこれまで記述されてこなかったため、本研究が初めて龍茗方言を言語学的に記述するものとなる。中国では1980年代以降にチワン語方言に関する専門書がいくつか⁽⁴⁾刊行されており、現在の広西・広東・雲南の約60地点におけるチワン語方言の音韻と語彙の概略を窺い知ることができる。日本におけるチワン語の先行研究には岩佐(1982)と吉川(2017)がある。しかし、これらはいずれも他のチワン語の方言に関する先行研究であり、本論文の主旨(龍茗方言の音韻体系を明らかにすること)にはほとんど関わりがないために贅言しない。

なお、Hudak(1991)にWilliam J. GedneyによるLungming方言の記述がまとめられている。“Lungming”とはかつての「龍茗」の英字表記である。ただし、Hudak(1991)にも明示されているように⁽⁵⁾、Gedneyが記述したLungming方言は旧龍茗県添等鎮の言語である。これは現在の行政区分に直すと、現天平等県天等鎮に相当し、本論文の見方からすると「天等方言」とでも名付けるべき方言である。つまりGedneyが記述した方言は本論文

でいう龍茗方言(現天等県龍茗鎮で使用される言語)とは異なる言語である。したがって、龍茗方言を初めて記述したのは本論文であり、Gedney ではないという事実は強調されなくてはならない。

2. 研究方法

2.1 話者

先述したように本論文では龍茗方言を母語とする筆者の内省に基づき分析を行う。筆者は1985年に天等県龍茗鎮逐仗屯に生まれ育った。15歳から18歳の3年間は龍茗を離れ、天等県城にある高校で過ごす。19歳の時、大学進学のため湖南省張家界へ移る。

2.2 研究方法

研究対象及び先行研究を踏まえて、以下のような研究手法を用いた。

まず、天等県の麗川方言の音韻体系を記述した『壮語音系匯編』⁶⁾(1961: 356-362)の語彙リスト、Pittayawat(2009: 322-361)の語彙リスト、及び筆者が作成した最小対(minimal pair)を成す語彙リスト、合わせて約1200語を、筆者の内省に基づいて記述した。次に、記述した語のすべてを龍茗方言母語話者である筆者の祖母(1941年生)と父(1962年生)に確認してもらった。本論文ではこの二人を協力者と呼ぶことにする。

3. 音韻体系

子音音素を認定する基準として、次の3つを用いる：1)同一の音声環境に現れ、入れ替えると意味が変わる2つの単音は、互いに対立し、それぞれ異なった音素に属するという「最小対の対立」(minimal pair contrast)の原則、2)音声的類似性を有する二つ(以上)の単音が同一の音声環境(位置)に現れない時、これらの単音は補いあう分布をなし、同一の音素に属する可能性が高いという「相補分布」の原則、3)二つの単音が同一の音声環境に現れ、互いに入れ替えても、その意味に変化が生じない時、それらの単音は「自由変異」(free variation)の関係にあり、同一の音素に属するという原則。

以上のような手続きに従って単音を分析すると、龍茗方言には次の45音素が認められる。母音音素の数は12であるが、そのうち長短の対立が認められるのは /i, i:/, /u, u:/, /

o, o:/, /a, a:/ の4組である。また、平音節⁽⁷⁾に5つの声調、促音節⁽⁸⁾に5つの声調が認められる。

子音音素(23)

p p^h t t^h c c^h k k^h ? m n ɲ ŋ f θ h w j ɰ β d l r

母音音素(12)

長母音音素(7) i: u: u: e: ɤ: o: a:

短母音音素(5) i u ɤ o a

声調素(10)

平音節(5) A1 A2 B1 B2 C

促音節(5) DL1 DL2 DS1 DS2 DS1'

本節では、子音(3.1)、母音(3.2)の順で音素分析を行った後に、音節構造(3.3)を明らかにする。また、3.4では龍茗方言の韻(母音と末子音の組み合わせ)として可能なものを表にまとめて提示する。

3.1 子音

3.1.1 子音音素体系

龍茗方言の子音音素は全部で23ある。これらは調音方法により、閉鎖音、鼻音、摩擦音、半母音、入破音及び流音に分類できる。ここでの閉鎖音には破擦音も含まれる(/c/と/c^h/は音声的に破擦音として実現される)。また接近音(approximant)を半母音(semi-vowel)と流音(liquid)とに分類しているが、流音とは舌尖ないし舌端と歯茎で狭めを形成する接近音と定義し、半母音はそれ以外の接近音として定義する。半母音は音声的に母音とほぼ同一であるが、両者の決定的な差異は分布にある。すなわち半母音は音節の核を占めることができず、核を占める母音の直後あるいは直前にのみ現れる。

子音はまた調音位置により、唇音、歯茎音、硬口蓋音、軟口蓋音、声門音に分類できる。ここで歯茎音として分類した/θ/と/r/は、通常、歯間音(interdental)として実現される。また、硬口蓋音として分類した/c/と/c^h/は、厳密には歯茎硬口蓋音(alveolo-palatal)として実現される。

以下の表1は調音位置と調音方法を基に龍茗方言の子音体系を示したものである。

表1 子音一覧表

調音位置 調音方法		唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
		閉鎖	非帯気	p	t	c
	帯気	p ^h	t ^h	c ^h	k ^h	
	鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
	摩擦音	f	θ			h
	半母音	w		j	ɥ	
	入破音	β	ɸ			
流音	側面的		l			
	中線的		r			

23の子音のすべてが頭子音として立ち得る。声門閉鎖音 /ʔ/ を除くすべての閉鎖音に非帯気・帯気の対立が有る。阻害音、共鳴音の区別に関わらず、無声・有声の対立は観察されない。入破音 [β, ɸ] と共鳴音(鼻音、半母音、流音)は音声的に有声であり、閉鎖音と摩擦音は音声的に無声である。

末子音として立ち得るのは /p, t, k, m, n, ŋ, w, j, ɥ/ の9子音である。すなわち、硬口蓋音と声門音を除いた非帯気閉鎖音、硬口蓋音を除いた鼻音、すべての半母音が末子音に立ち得る。

子音結合は存在するが、頭子音に限られ、結合できる子音の数は最大2であり、第2子音は必ず /w/ あるいは /j/ のいずれかである(例えば、/kw-/、/kj-/)。また、/w/ あるいは /j/ と結合できる子音には一定の制約がある。

3.1.2 子音音素目録

表2は龍茗方言の子音音素の目録である。用例には意味が異なり最小対の対立を示すものを挙げる。「音声とその環境」には、子音の置かれた音的環境により相補的に現れる異音、すなわち条件異音を示す。//内は音素、[]内は音声である。「」は無開放の閉鎖音、いわゆる内破音を表す。音節末の閉鎖音は必ず内破音であり、内破音は音節末の閉鎖音に限られる。したがって、表記が煩雑になることを防ぐために、表2以外の記述ではこの記号を省略する。また、用例欄の A1、B1、C、DL1、DS2などは声調表記である。同じく用例欄の「」内は語の日本語での意味である。

表2 子音音素目録

調音方法	音素	音声とその環境	用例
閉鎖音	/p/	[p] 音節頭：無声両唇閉鎖音。開放する。 [p̚] 音節末：無声両唇閉鎖音。開放しない。	/pa:/[pa:] A1「遮って止める」 /pap/[pap̚] DS2「折り畳む」
	/p ^h /	[p ^h]：無声帯気両唇閉鎖音	/p ^h a:/[p ^h a:] A1「亀」
	/t/	[t] 音節頭：無声歯茎閉鎖音。開放する。 [t̚] 音節末：無声両唇閉鎖音。開放しない。	/ta:/[ta:] A1「手で叩く」 /mwat/[mwat̚] DS2「蟻」
	/t ^h /	[t ^h]：無声帯気歯茎閉鎖音	/t ^h a:/[t ^h a:] A1「目」
	/c/	[tɕ]：無声非帯気歯茎硬口蓋破擦音	/ca:/[tɕa:] A1「石のかす」
	/c ^h /	[tɕ ^h]：無声帯気歯茎硬口蓋破擦音 ※[ɕ~tɕ ^h]の自由変異音 (free variant) を持つ。	/c ^h a:/[tɕ ^h a:] A1「不足する」 /c ^h ap/[c ^h ap̚]~[tɕ ^h ap̚] DS1「差し込む」 /c ^h au/[c ^h au]~[tɕ ^h au] C一緒に
	/k/	[k] 音節頭：無声軟口蓋閉鎖音。開放する。 [k̚] 音節末：無声軟口蓋閉鎖音。開放しない。	/ka:/[ka:] A1「カラス」 /lak/[lak̚] DS2「盗む」
	/k ^h /	[k ^h]：無声帯気軟口蓋閉鎖音	/k ^h a:/[k ^h a:] A1「足」
	/ʔ/	[ʔ]：無声声門閉鎖音	/ʔa:/[ʔa:] A2「祖父の妹」
鼻音	/m/	[m]：有声両唇鼻音	/ma:/[ma:] A2「来る」 /dam/[dam] A2「黒い」
	/n/	[n]：有声歯茎鼻音	/na:/[na:] A2「水田、稲田」 /fan/[fan] A2「種」
	/ɲ/	[ɲ] 音節頭：有声硬口蓋鼻音	/ɲa:/[ɲa:] A2「象の歯」
	/ŋ/	[ŋ] 音節末：有声軟口蓋鼻音	/ŋa:/[ŋa:] A2「胡麻」 /daŋ/[daŋ] A2「鼻」
摩擦音	/f/	[f]：無声唇歯摩擦音。摩擦は余り強くない。	/fa:/[fa:] C「空、天気」
	/θ/	[θ]：無声歯間摩擦音	/θa:/[θa:] C「穴が大きめな竹の籠」
	/h/	[h]：無声声門摩擦音	/ha:/[ha:] C「五」
接近音	/w/	[v] 音節頭：有声唇歯摩擦音、摩擦がやや弱い。 [w] 子音結合の第2要素： [w] 音節末：有声両唇接近音	/wa:/[va:] A2「昨日」 /dwa:/[dwa:] A2「はしご」 /ɓaw/[ɓaw] A2「軽い」
	/j/	[j]~[j̥] 音節頭かつ母音の前：有声硬口蓋摩擦音あるいは接近音。摩擦がないか、あっても非常に弱い。 [j] 子音結合の第2要素：有声硬口蓋接近音。 [j̥] 音節末：有声硬口蓋接近音。	/ja:/[ja:]~[ja:] A2「葉」 /pjaw/[pjaw] A2「晩ご飯」 /faj/[faj] A2「火」 /jwan/[jwan] A2「びっくりす」

		[j] 音節頭かつ/w/の前：有声硬口蓋摩擦音。	る」
	/ɥ/	[v] 音節頭：軟口蓋有声摩擦音 [ɥ] 音節末	/ɥa:/[va:] A2「チガヤ」 /ɥau/[ɥau] A2「葉っぱ」
入破音	/β/	[β] 音節頭：両唇入破音	/βa:/[βa:] B1「肩」
	/d/	[d] 音節頭：歯茎入破音	/da:/[da:] B1「叱る」
流音	/l/	[l]：有声歯茎側面音	/la:w/[la:w] A1「恐れる」
	/r/	[ð] 音節頭かつ母音の前：有声歯間摩擦音。 摩擦は余り強くない。 [ɾ] 音節頭かつ/w/の前：有声歯茎接近音。	/ra:w/[ða:w] A1「(容器で物を)量る」 /rwa:/[ɾwa:] B2「(尿などが)漏れる」

次に子音の特徴及び子音音素について詳述する。

- (1) 語末の無声閉鎖音 /p, t, k/ は、一般に調音点での閉鎖により呼気の流れを止めるのみの発音で、閉鎖後の破裂を伴わない。
- (2) 母音始まりの音節は存在しない。一見母音始まりに見える音節であっても音節頭に必ず声門閉鎖音がある(例えば /ʔa:/[ʔa:] A2「祖父の妹」)。本論文では音素として清音閉鎖音 /ʔ/ を立てるが、その根拠は以下の最小対の存在にある。

/ʔjat/[ʔjat]DS1 「一」vs. /jat/[jat]DS1 「飛び跳ねる」

/ʔwat/[ʔwat]DS1 「塞ぐ」vs. /wat/[vat]DS1 「寒気(病気名)」

- (3) /c^h/ は帯気歯茎硬口蓋破擦音の [tc^h] で実現することもあれば、歯茎軟口蓋摩擦音 [c] で実現することもある。すなわち自由変異 (free variation) が認められる。本研究の協力者である筆者の父(1962生)は常に [tc^h] と発音するが、筆者及び協力者である筆者の祖母(1942生)は [c~tc^h] のゆれが見られる。例えば、/c^hap/DS1「差し込む」の頭子音は破擦音としても摩擦音としても現れ得る。これらの音は同じ音声的環境に現れてお互いに交換可能であり ([cap]DS1 と言っても [tc^hap]DS1 と言ってもよい)、この2音の違いは意味の区別には関係しない。

一方、以下に示すように、[tc] は、[c] あるいは [tc^h] と対立する。したがって非帯気・帯気で対立する音素 /c/ と /c^h/ を立てることができる。

/cam/[tcam] A2「白を強要する」vs. /c^ham/[cam]~[tc^ham] A2「沈没する」

/cat/[tcat]DS1「七」vs. /c^hat/[cat]~[tc^hat]DS1「塗料」

/cik/[tcik]DS1「お悔やみに贈る贈り物」vs. /c^hik/[cik]~[tc^hik]DS1「ものさし」

- (4) 歯茎硬口蓋の鼻音 [ɲ] は、鼻音 /n/ と対立するだけでなく、子音結合の /nj/ と対立

する。

/na:p/[na:p]DL2「納まる」vs. /nja:p/[nja:p]DL2「縫う」vs. /na:p/[na:p]DL2「縮む」

(5) 半母音の /w/, /j/, /ɥ/ はいずれも頭子音や末子音として現れる。しかし、/w/, /j/ の2音素のみが子音結合の第2要素として音節中にも現れるが、/ɥ/ は音節頭と音節末にしか現れない。

(6) /l/ と /r/ を流音(liquid)と分析する。前述のように本論文では、流音を舌尖ないし舌端と歯茎とで狭めを形成する接近音と定義する。流音 /l/ では、舌端と歯茎によって、声道の中央に完全な閉鎖が形成されるが、調音位置の側面には閉鎖が形成されず、気流の通路が確保される。すなわち側面的な調音がなされる。したがって側面流音と解釈する。一方、流音 /r/ は舌端あるいは舌尖と歯茎あるいは歯とで狭めが形成されるが、声道の中央に気流の通路が確保される。すなわち中線的な調音がなされる。したがって中線流音と解釈する。

流音 /r/ は、以下の表に示すように、有声歯茎接近音 [ɹ] と有声歯間摩擦音 [ð] という条件異音(conditional allophone)を持つ。表3は [ɹ] と [ð] とが相補分布することを表している。この事実に基づいて、歯茎接近音 [ɹ] 及び有声摩擦音 [ð] は、音素 /r/ に属する条件異音であると解釈する。ところで、龍茗方言の音韻体系では有声 / 無声の対立が存在しない。もし、[ɹ] と [ð] とを異音に持つ音素を有声摩擦音 [ð] と見なすのならば、すでに音

表3 [ð] と [ɹ] の条件異音

母音	[ð]	[ɹ]
/i:/	/ri:/[ði:] A2 「(水を) かける」	
/u:/	/ru:ŋ/[ðu:ŋ] B2 「緩める」	
/u:/	/ru:/[ðu:] A1 「笑う」	
/e:/	/re:/[ðe:] A1 「魚網」	/rwe:/[rwe:] A1 「皮むき」
/o:/	/ro:/[ðo:] A1 「水虫」	
/a:/	/ra:/[ða:] C 「あざが付く」	/rwan/[ɹwan] A2 「四つんばいにはう」
/i/	/rip/[ðip] DS2 「募る」	
/u/	/ruk/[ðok] DS1 「繋がりになった物を数える量詞」	
/ɹ/	/rɹw/[ðɹw] C 「知る、できる」	
/o/	/rok/[ðok] DS2 「すりばち」	
/a/	/ram/[ðam] A2 「もみがら」	

声的に無声で実現される音素 /θ/ を認めている以上、問題の2組の音素にのみ有声/無声の対立を認めなければならないことになる。これは体系として不経済である。この音素を摩擦音としてではなく流音 /r/ として解釈すれば、体系の一貫性を保つことができる。この音素の流音としての性質を示すために、音韻表記は /r/ とする。

3.1.3 子音結合

龍茗方言の子音結合に見られる子音結合の第2要素は /w/ と /j/ の2音素のみで、シャム語のように /l/ や /r/ が第2要素に立つことはない。一方、子音結合の第1要素となり得る子音の種類は、龍茗方言では20であるが、シャム語は5(破裂音の /tʰ/ を除く /p, pʰ, t, k, kʰ/) であり、結合における制約はシャム語と比較して龍茗方言の方が緩やかである。

表5に龍茗方言における子音結合の体系を示す。/θj/, /hj/ のように漢語の借用語にのみ見られるもの、/ɲw/, /jw/ のようにごく少数の語にしか見出せないものなどがある。

子音結合の第1要素になることができない子音は、/f/, /w/, /ɥ/ の3つである。子音

表5 子音結合

調音方法	頭子音音素	/-w-/	/-j-/		/f/		
閉鎖音	/p/		/pj-/	摩擦音	/θ/	/θw-/	/θj-/
	/pʰ/		/pʰj-/		/h/	/hw-/	/hj-/
	/t/	/tw-/	/tj-/		接近音	/w/	
	/tʰ/		/tʰj-/	/j/		/jw-/	
	/c/	/cw-/		入破音	/ɸ-/	/ɸw-/	/ɸj-/
	/cʰ/	/cʰw-/			/ɸ-/	/ɸw-/	/ɸj-/
	/k/	/kw-/	/kj-/	流音	/l/	/lw-/	/lj-/
	/kʰ/	/kʰw-/	/kʰj-/		/r/	/rw-/	
	/ʔ/	/ʔw-/	/ʔj-/	合計	20	17	14
鼻音	/m/	/mw-/	/mj-/				
	/n/	/nw-/	/nj-/				
	/ɲ/	/ɲw-/					
	/ŋ/	/ŋw/					

結合の第1要素となる得る子音の種類は20あり、そのうち17は/w/と結合し、14は/j/と結合する。それらの語例を以下の表6に示す。

表6 子音結合の語例

調音方法	頭子音音素	/-w-/	/-j-/
閉鎖音	/p/		/pjuk/[pjok] DS1「明日」 /pju:j/[pju:j] B1「放牧する」 /pjo:ŋ/[pjo:ŋ] B2「半分」 /pja:k/[pja:k] DL1「移植する」
	/p ^h /		/p ^h ju:k/[p ^h ju:k] DL1「サトイモ」 /p ^h jym/[p ^h jym] A1「髪の毛」 /p ^h jo:k/[p ^h jo:k] DL1「竹を薄く裂いたもの」 /p ^h ja:k/[p ^h ja:k] DL1「日に当てる」
	/t/	/twat/[twat] DS1「尻」	/tjat/[tjat] DS1「切る」
	/t ^h /		/t ^h jap/[t ^h jap] DS1「雹、霰」
	/c/	/cwɔj/[tɔwɔj] C「指す」 /cwan/[tɔwan] B1「腐った木に寄生する虫」	
	/c ^h /	/c ^h wa:ŋ/[tɔ ^h wa:ŋ] B1「窓」 /c ^h wɔj/[tɔ ^h wɔj] C「似る」	
	/k/	/kwɪn/[kwɪn] A2「握り拳」 /kwe:n/[k ^w œn] B1「慣れている」 /kwɔt/[kwɔt] DS1「シダ植物類」 /kwaj/[kwaj] A1「遠い」	/kju:r/[kju:r] A1「塩」 /kju:j/[kju:j] C「バナナ」 /kjo:ŋ/[kjo:ŋ] A1太鼓 /kjaɔ/[kjaɔ] C「近い」
	/k ^h /	/k ^h wɪn/[k ^h wɪn] A1「輪、丸、円」 /k ^h we:n/[k ^h wœn] A1「吊るす」 /k ^h wɔn/[k ^h wɔn] A1「毛」 /k ^h wan/[k ^h wan] A1「靈魂」 /k ^h wa:/[k ^h wa:] B1「ズボン」	/k ^h ja:/[k ^h ja:] B1「脅迫する」
	/ʔ/	/ʔwat/[ʔwat] DS1「栓をする、塞ぐ」	/ʔjat/[ʔjat] DS1「一」
鼻音	/m/	/mwat/[mwat] DS2 蟻	/mja:p/[mja:p] DL2「欺く」
	/n/	/nwa:[nwa:] B2「イチジク」	/njat/[njat] DS1「愛する」
	/ɲ/	/ɲwa:n/[ɲwa:n] B2「〈詩などを〉吟唱する」	
	/ŋ/	/ŋwa:ŋ/[ŋwa:ŋ] B2「馬鹿者」	

摩擦音	/f/		
	/θ/	/θwa:j/[θwa:j] A1「遅れる」	/θja:w/[θja:w] A1「小学の小の音読み」
	/h/	/hwat/[hwat] DS1「怯む」	/hjo:/[hjo:] A2「小学の学の音読み」
接近音	/w/		
	/j/	/jwan/[jwa:n] A2「びっくりする」	
	/ɥ/		
入破音	/β-/	/βwat/[βwat] DS1「漬物をする」	/βjat/[βjat] DS1「釣り針」
	/d-/	/dwaj/[dwaj] A2「はしご」	/djat/[djat] DS1「濡れる」
流音	/l/	/lwaj/[lwaj] A1「流れる」	/ljap/[ljap] DS2「爪」
	/r/	/rwa:n/[rwa:n] A2「四つんばいにはう」	

表6から分かるように、子音結合の第2要素である /w/ は、非円唇母音の /i:/, /e:/, /ɤ/, /a, a:/ とは結合できるが、円唇母音とは結合できないという制約がある。

/k^hwi:n/[k^hwi:n]A1「輪、丸、円」 /k^hwe:n/[k^hwœn]A1「吊るす」

/k^hwɤn/[k^hwɤn]A1「毛」 /k^hwan/[k^hwan]A1「靈魂」 /k^hwa:/[k^hwa:]B1「ズボン」

子音結合の第2要素である /j/ は後舌母音の /u, u:/, /ɥ/, /ɤ/, /o, o:/, /a, a:/ と結合できるが、前舌母音とは結合できないという制約がある。

/pjuk/[pjok]DS1「明日、将来」 /pju:j/[pju:j]B1「放牧する」

/p^hju:k/[p^hju:k]DL1「サトイモ」 /p^hjɤm/[p^hjɤm]A1「髪の毛」

/pjok/[pjok]DS1「呼び醒ます」 /p^hjo:k/[p^hjo:k]DL1「竹を薄く裂いた物」

/mwat/[mwat]DS2「蟻」 /p^hja:k/[p^hja:k]DL1「日に当てる」

3.1.4 末子音

すでに述べたように龍若方言に見られる末子音は /p, t, k, m, n, ŋ, w, j, ɥ/ の9子音である。その内、無声閉鎖音 /p, t, k/ はどれも閉鎖の開放を伴わない内破音であるが、声調は促音節の声調(5種類)のいずれかで実現する。末子音として現れる /w, j, ɥ/ は音声学的性格から言えば母音の [u], [i], [ɥ] である。

以下の表7に末子音の最小対の例を示す。

表7 末子音の最小対の例

調音方法	末唇子音	用例
閉鎖音	/p/	/θa:p/[θa:p] DL1「ゴキブリ」
	/t/	/θa:t/[θa:t] DL1「ブラシ」
	/k/	/θa:k/[θa:k] DL1「すりこぎ」
鼻音	/m/	/θa:m/[θa:m] A1「三」
	/n/	/θa:n/[θa:n] A1「(籠などを) 編む」
	/ŋ/	/θa:ŋ/[θa:ŋ] A1「棺桶」
接近音	/w/	/θa:w/[θa:w] A1「未婚女性」
	/j/	/θa:j/[θa:j] A1「紐」
	/ɥ/	/θa:ɥ/[θa:ɥ] A1「澄みきったさま」

以上の分析をまとめる。龍若方言の子音は全部で23あり、音節初頭には23の子音すべてが、そして音節末尾には9つが現れる。また、子音結合の第1要素となる得る子音(/f/, /w/, /ɥ/を除く)は20あり、子音結合の組み合わせは31あるが、子音結合は音節初頭にしか現れない。龍若方言の子音体系の特徴は、1)音節頭に立つ頭子音と音節末に立つ末子音とではその体系と音声学的性格が異なる、2)頭子音については、有声の入破音が2つ(/β/, /d/)あり、3)帯気音と非帯気音の対立が /p/ vs. /p^h/, /t/ vs. /t^h/, /c/ vs. /c^h/, /k/ vs. /k^h/ の4組に見られる。4)末子音については、その種類が、無声閉鎖音 /p, t, k/, 鼻音 /m, n, ŋ/, 接近音 /w, j, ɥ/ の9つに限られており、そのうち無声閉鎖音は子音の開放を伴わない内破音である。

3.2 母音

3.2.1 母音音素体系

龍若方言の母音音素体系には7つの長母音音素の /i:/, /u:/, /e:/, /ɛ:/, /o:/, /a:/ と5つの短母音音素の /i/, /u/, /ɛ/, /o/, /a/ がある。/ɛ:/を除いたすべての長母音は開音節(open syllable、母音で終わる音節)及び閉音節(closed syllable、子音で終わる音節)いずれにも現れ得る。一方、短母音は閉音節にのみ実現可能である。したがって、母音の長短の対立は閉音節にのみ見られ、開音節にはその対立はない。長短で対立する母音音素は /i:i:/, /u:u:/, /o:o:/, /a:a:/ である。一方、/ɛ:/ は開音節にのみ現れ、/ɛ/ は閉音節にのみ現れる。すなわち両者は相補分布(complementary distribution)を成している。したがって両者を単一の音素の条件異音とみなすことが可能であるが、本論文ではその

立場とはらず、それぞれ独立の音素、/ɾ:/、/ɻ/ と解釈する。その理由は、開音節と閉音節という条件の違いで相補分布し、かつ前者において長母音で、後者において短母音のみで実現されるような母音音素が、他に存在していないことにある。/u:/ と /e:/ は長短の対立が見られず、常に長く発音される。

これらの単母音に加えて、二重母音や三重母音と解釈可能な母音が存在するが、本論文では二重母音や三重母音は認めない立場をとる。その代わりに、問題の母音は単母音と子音の連鎖であると解釈する。例えば音声的に(1) [iɪ, eɪ, ɹɪ, aɪ, aɪ], (2) [ui, vi, oi, ai, ai] (3) [yuu, au, a:u] のように実現される母音があるが、これらは単母音と尾子音の連鎖であり、その尾子音はそれぞれ、/w/、/j/、/w/ と解釈する。同様に、音声的に(4) [ue:, uy, ua, ua], (5) [iu, iu, iy, io, ia] のように実現される母音があるが、これらは子音結合の第2子音と単母音の連鎖であり、その頭母音は /w/ と /j/ と解釈する。さらに、音声的に(6) [uvi, uai, iui, iau] のように実現される母音が存在するが、これらは子音結合の第2子音 (/j/ あるいは /w/)・短母音・尾子音 (/j/ あるいは /w/) の連鎖と解釈する。

舌の前後位置によって龍茗方言の母音を分類すると次のようになる。

前舌母音：/i:/ /i/ /e:/

後舌母音：/u:/ /u:/ /u/ /ɾ:/ /ɻ/ /o:/ /o/ /a:/ /a/

母音のほとんどは後舌母音である。短母音 /i/ は長母音 /i:/ よりやや広くて英語の it の [ɪ] に近く、舌の高さは長母音 /i:/ より低い。短母音 /ɾ/ は長母音 /ɾ:/ よりも舌が低

く下がって発音される。短母音 /u/ は長母音 /u:/ よりやや広くて英語の put の [ʊ] に近く、舌根が咽頭方向へ引かれる。短母音 /o/ は [ɔ] に近く、舌は長母音 /o:/ よりも低い位置にある。また、低母音である短母音 /a/ は長母音 /a:/ より若干後舌よりである。

表8 母音体系

	前舌	後舌	
	非円唇	非円唇	円唇
高	/i:/ /i/	/u:/	/u:/ /u/
中	/e:/	/ɾ:/ /ɻ/	/o:/ /o/
低		/a:/ /a/	

以上述べた舌の各位置に加えて唇の形を基準に龍茗方言の母音をまとめると表8のようになる。この表の各欄は口腔の縦・横両面に対応している。

3.2.2 母音音素目録

前述したように、龍茗方言の母音音素には長短の対立があるが、その対立は閉音節のみで見られる(開音節では長母音しか現れない)。長短の対立は、/i, i:/, /u, u:/, /o, o:/, /a,

a:/ のみに認められる。一方、/u:/ と /e:/ は対立する短母音が存在しない。また、本論文が独立の音素として認めた /ɣ:/ と /ɣ/ は、前者は開音節のみに現れ、後者は閉音節のみに現れる(相補分布する)ために、厳密には長短の対立と見なすことはできない。以上のように、龍若方言の母音における長短の対立には非対称性が認められる。

3.2.2.1 母音音素とその認定

母音によって対立する最小対として、次の語群が挙げられる。

/θi:/[θi:]A2「成長が停滞する(単独で使わず kit DL1 θi: A2 と言う)」

/θu:/[θu:]A2「風俗習慣(単独で使わず foŋ B1 θu: A2 と言う)」

/θu:/[θu:]A2「詞、語彙」

/θe:/[θe:]A2「雪」

/θɣ:/[θɣ:]A2「色」

/θo:/[θo:]A2「プラスチック(単独で使わず θo:A2 ljawC と言う)」

/θa:/[θa:]A2「浮き台、竹製の筏」

または、

/mi:/[mi:]A2「夢中に」

/mu:/[mu:]A2「(町に)行く」

/mu:/[mu:]A2「畑作業(仕事)に専念すぎる」

/me:/[me:]A2「竹の一種」

/mɣ:/[mɣ:]A2「麦」

/mo:/[mo:]A2「牛」

/ma:/[ma:]A2「来る」

以上の最小対から、7つの長母音音素 /i:, u:, u:, e:, ɣ:, o:, a:/ を取り出すことができる。

一方、

/k^him/[k^him]A1「針」、/k^ham/[k^ham]A1「曇る」、/k^hɣm/[k^hɣm]A1「苦い」

/θuk/[θuk]DS1「熟する」、/θik/[θik]DS1「錫」

/cik/[tɕik]DS2「まっすぐな、一直線の」、/cok/[tɕok]DS2「痒い」

/cak/[tɕak]DS1「割る」、/cuk/[tɕok]DS1「粥」、/cok/[tɕok]DS1「くすぐる」

/mɣk/[mɣk]DS2「墨」、/muk/[muk]DS2「(穀物の)粉末」

/tɣk/[tɣk]DS1「去勢する」、/tok/[tɕok]DS1「落ちる」

の例から5つの短母音音素 /i, u, o, ɤ, a/ が認められる。

さらに、

/kim/[kɪm] A2「プレイヤー」、/ki:m/[ki:m] A2「アンクレット」

/fuŋ/[foŋ] A2「屋根を覆う」、/fu:ŋ/[fu:ŋ] A2「部屋」

/koŋ/[kɔŋ] A1「仕事、農作業」、/ko:ŋ/[ko:ŋ] A1「小さい塊(糞便など)を数える類別詞」

/daŋ/[daŋ] A2「鼻」、/da:ŋ/[da:ŋ] A2「体、身体」

から音素 /i, i:/, /u, u:/, /o, o:/, /a, a:/ の対立が認められる。

3.2.2.2 母音音素目録

表9は龍茗方言の母音音素の目録をまとめたものである。「音声とその環境」には、母音の置かれた音的環境により相補的に現れる代表的な異音を示す。//内は音素、[]内

表9 母音音素目録

母音音素	音声とその環境	用例
/i/	[ɪ] 短母音：非円唇前舌狭母音	/dɪp/[dɪp] DS1「生の、生煮えの」
/i:/	[i:] 長母音：非円唇前舌狭母音	/dɪ:p/[dɪ:p] DL1「可愛がる」
/u:/	[u:] 長母音：非円唇後舌狭母音	/tʰu:ŋ/[tʰu:ŋ] A1「砂糖」
/u/	[o] 短母音：円唇後舌狭母音、軟口蓋音 /k, ŋ/ の前にしか現れない。	/muk/[mɔk] DS1「鼻水」
/u:/	[u:] 長母音：円唇後舌狭母音	/mu:k/[mu:k] DL1「米のとぎ汁」
/e:/	[e:] 長母音：非円唇前半狭母音 ※ただし、/w/ の後ろでは [œ] で実現する。[e:] と [œ] の相補分布が認められる。	/kʰe:n/[kʰe:n] A1「袖」 /ken/[ken] B1「硬い」 /kʰwe:n/[kʰwœ:n] A1「吊す」 /kwe:n/[kwœ:n] B1「慣れている」
/ɤ/	[ɤ] 短母音：中舌半狭母音、長い [ɤ:] よりやや広い。	/ʔɤk/[ʔɤk] DS1「胸」
/ɤ:/	[ɤ:] 長母音：中舌半狭母音、借用語、語気助詞、オノマトペなどにしか現れない。 ※ [ɤ] と [ɤ:] は相補分布している。	/θɤ:/[θɤ:] A2「色」
/o/	[ɔ] 短母音：円唇後舌半広母音、軟口蓋音 /k, ŋ/ の前にしか現れない。	/lok/[lɔk] DS1「引き抜く」
/o:/	[o:] 長母音：円唇後舌半狭母音	/lo:k/[lo:k] /DL1「剥ぐ」
/a/	[a] 円唇中舌広母音、[a:] よりやや後ろよりである。	/θap/[θap] DS1「渋い」
/a:/	[a:] 円唇中舌広母音、	/θa:p/[θa:p] DL1「ゴキブリ」

は音声である。また、用例欄の A1、B1、C、DL1、DS1 などは声調表記で、同じく用例欄の「」内は龍茗方言における日本語の意味である。

以上からも分かるように龍茗方言の母音音素は 12 あり、音韻論的に /i, i:/, /u, u:/, /o, o:/, /a, a:/ の長短が区別される。音声的には、二重母音や三重母音と見なし得る母音が存在するが、本研究はこれらを独立の音素とは認めず、単母音と子音の連鎖と解釈する。

3.3 音節構造

龍茗方言は単音節声調言語である。すなわち、基本的な語のほとんどが 1 音節から成り、その音節に声調がかぶさる。声調とは音節内部の音の高低の変化のことである。声調の違いが単語の区別に使われる。龍茗方言のすべての音節は、子音、母音、声調の 3 つから成り立っている。具体的には次の三要素に分かれる。

1) 頭子音：音節頭の子音

2) 韻(Rhyme)：音節主核母音と任意の音節末子音からなる。末子音の有無は母音の長さに関係している。母音が長母音の時は末子音が任意であるが、短母音の時は常に末子音を要求する。

3) 声調：音節にかぶさる超分節要素

龍茗方言の音節の構造を簡略に表すと、次のようになる。

音節 = 子音 1(+子音 2)+母音+(子音 3)/声調

音節初頭の子音 1 を頭子音、音節末尾の子音 3 を末子音と呼ぶ。以下では子音を C、母音を V、声調を T、子音結合を CC、長母音を VV で表す。龍茗方言の音節の種類には次の 6 種が有る。

- | | | |
|----------|--|------|
| ① CVV/T | /t ^h u:/[t ^h u:]A1 | 「頭」 |
| ② CCVV/T | /pja:/[pja:]A1 | 「魚」 |
| ③ CVC/T | /lan/[lan]A1 | 「背中」 |
| ④ CVVC/T | /pa:k/[pa:k]DL1 | 「口」 |

⑤ CCVC/T /p^hjak/[p^hjak]DS1 「野菜、料理」

⑥ CCVVC/T /pjo:k/[pjo:k]DL1 「花」

3.4 韻表

前述したように、韻は主核母音と任意の末子音に分類できる。以下にそれらの分布を示すものとして、龍茗方言の体系として許容される韻表(表 10、表 11)を示す。

表 10 龍茗方言韻表・促音節 (音素表記)

開閉	促音節 (28)					
末子音	p		t		k	
長短 母音	短	長	短	長	短	長
—a—	—ap	—a:p	—at	—a:t	—ak	—a:k
—i—	—ip	—i:p	—it	—i:t	—ik	—i:k
—u—				—u:t		—u:k
—u—		—u:p		—u:t	—uk	—u:k
—e—		—e:p		—e:t		—e:k
—ɣ—	—ɣp		—ɣt		—ɣk	
—o—		—o:p		—o:t	—ok	—o:k

表 11 龍茗方言韻表・平音節 (音素表記)

開閉	平音節 (47)												
末子音	無	m		n		ŋ		j		w		ɥ	
長短 母音	長	短	長	短	長	短	長	短	長	短	長	短	長
—a—	—a:	—am	—a:m	—an	—a:n	—aŋ	—a:ŋ	—aj	—a:j	—aw	—a:w	—aɥ	—a:ɥ
—i—	—i:	—im	—i:m	—in	—i:n	—iŋ	—i:ŋ				—i:w		
—u—	—u:		—u:n			—uŋ	—u:ŋ						
—u—	—u:		—u:m		—u:n	—uŋ	—u:ŋ		—u:j				
—e—	—e:		—e:m		—e:n		—e:ŋ				—e:w		
—ɣ—	—ɣ:	—ɣm		—ɣn		—ɣŋ		—ɣj		—ɣw		—ɣɥ	
—o—	—o:		—o:m		—o:n		—o:ŋ		—o:j				

表 10、表 11 より、促音節には 28、平音節には 47、合計 75 の韻が認められる。末子音 /j/ は非前舌母音の /a, a:/、/u:/、/ɣ/、/o:/ と結合し、末子音 /w/ は非円唇母音の /a, a:/、/i:/、/e:/、/ɣ/ と結合して韻を形成する。非狭母音かつ後舌母音の /a/ と /ɣ/ が末子音 /uɣ/ と韻を形成する。すべての末子音と韻を形成できる母音は /a, a:/ のみである。

4. 声調

広西語委研究室編(1994)は、58 地点のチワン語諸方言のほとんどにおいて、平音節には 6 声調、促音節には 4 声調が認められるとしている⁽⁹⁾。龍茗方言には、平音節に 5 つの声調、促音節に 5 つの声調が認められる。すなわち、龍茗方言は、多くのチワン語諸方言と比較して、平音節の声調の数が 1 つ少なく、促音節の声調の数が 1 つ多い。定説によると、タイ祖語に再建される平音節の声調の数は 3 であり、それぞれ A, B, C と呼ばれるが、チワン語諸方言の多くでは、祖語におけるこれらの声調が、音節頭の子音の有声性によって分裂を起こすことによって、声調の数が倍(3~6 へ)になったという。(それぞれ A1, A2, B1, B2, C1, C2 と呼ばれる)。紙面の都合上詳述できないが、龍茗方言では祖語の声調 A, B は分裂を起こしているが、声調 C は分裂を起こしておらず、したがって平音節の声調の数が他方言より 1 つ少ない。祖語の声調 C に分裂が生じていないという点において、龍茗方言は祖語の体系をより忠実に保持する古風な声調体系を持つということが出来る。促音節の声調の数が他方言より 1 つ多い理由は不明である。

ところで、声調の数をどのように数えるかは、用いられる枠組みによって異なる。広西語委研究室編(1994)の声調表記は、中国語学の枠組みに従って、調類(tonal category、声調の種類)という概念を用いている。この枠組みでは、同じ調値⁽¹⁰⁾(tonal value、声調の実現値、ピッチパターン)を持つ声調でも、音節構造(平音節あるいは促音節)、または母音の長短が異なれば、それぞれを別の声調、すなわち調類と見なす。本論文における A, B, C, D 等のアルファベットを用いた声調表記も同様である。この枠組みでは、A, B, C は平音節の声調を、D は促音節の声調を表しており、声調は音節構造に基づいて分類されている。促音節の声調はさらに DS と DL に下位分類される。前者は短母音を伴う促音節の声調であり、後者は長母音を伴う促音節の声調であり、促音節の声調は母音の長短によって分類されている。後述するように、例えば龍茗方言の B2, DS1, DL2 はほぼ同一の調値を持つが、音節構造の違いによって B2 と DS1, DL2 とに分類され、後者は母音の長短に

よって DS1 と DL2 とに分類される。

本節では新たに、もっぱら調値に基づいて、龍茗方言の声調の分類を試みる。伝統的な枠組みを用いると、龍茗方言には、先述の通り、平音節に5つの声調、促音節に5つの声調、合計10個の声調が観察されることになる。しかしながら、音節構造および母音の長短に関わらず、同じ調値を持つ声調を同一の声調とみなすことで、声調の数は10から5に減じられる。

表12は龍茗方言に観察される声調を示す。調値を表す5段階数字は、相対的な音の高さの幅で、絶対的なものではない。1が低域、2が次低域、3が中域、4が次高域、5が高域を表す。2つ並んだ数値は声調の始端と終端の2か所のピッチをそれぞれ表す。3つの数値によって表記されているものは、両端の数値が始端と終端の高さを、真ん中の数値がピッチ変化の方向が変わる時点の高さを表す。DSは短母音促音節の声調、DLは長母音促音節の声調を表す。

表12 声調種類

音節種類別	名称	調値	特徴	用例
平音節	A1	451	下降調：次高域から高域まで上昇し、高域から低域まで一気に下降する。	/na:/[na:] A1「厚い」
	A2	31	中降調：中域に始まり、低域まで下降する。	/na:/[na:] A2「田畑」
	B1	241	昇降調：次低域に始まり、次高域まで上昇してから低域まで下降する。	/na:/[na:] B1「竹の皮」
	B2	33	中平調：中域に始まり、そのまま平らに持続する。	/na:/[na:] B2「母の妹」
	C	213	上昇調：次低域に始まり、低域まで下降して中域まで緩やかに上昇する。	/na:/[na:] C「顔」
促音節	DS1	33	促音節短母音の中平調：中域に始まり、そのまま平らに持続する。	/pak/[pak] DS1「差し込む」
	DL1	24	促音節長母音の上昇調：次低域に始まり、次高域まで上昇する。	/pa:k/[pa:k] DL1「口」
	DS2	31	促音節短母音の中降調：中域に始まり、低域まで下降する。	/pak/[pak] DS2「疲れる」
	DL2	33	促音節長母音の中平調：中域に始まり、そのまま平らに持続する。	/pa:k/[pa:k] DL2「精神病」
	DS1'	45	促音節長母音の中昇調：中域に始まり、次高域まで上昇する。	/pak/[pak] DS1'「北方」

表 12 の語の基本周波数曲線を図 1-2 に示す。図の上部が音声波形であり、下部がサウンドスペクトログラムに基本周波数曲線を重ねた図である。基本周波数曲線は音の高低の感覚(すなわちピッチ)を決付ける主要な音響特徴である。

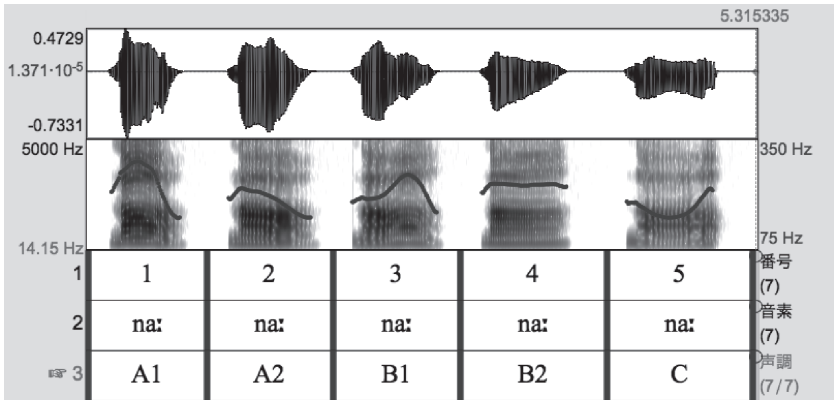


図 1 Praat による平音節のピッチの表示

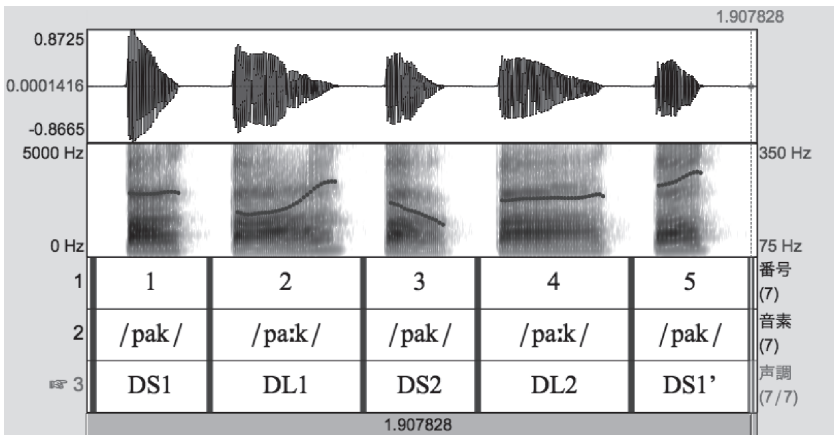


図 2 Praat による促音節のピッチの表示

調値に注目すると A2 は DS2 とほぼ同じ調値(31)であり、B2 は DS1 と DL2 と同じ調値(33)であることが分かる。本節の提案する新たな枠組みにしたがって、A2 と DS2 は調値 31 を持つ同一の声調であり、B2 と DS1 と DL2 は調値 33 を持つ同一の声調であると解釈される。

加えて、まったく同じ調値を持つわけではないが、顕著に類似する声調があることが注目される。A1(451)とDS1'(45)のペア、およびB1(241)とDL1(24)のペアがそれである。ペアをなす成員の音節構造に注目すると、平音節と促音節とがペアをなしていることがわかる。また調値に注目すると、促音節の調値は、平音節の調値の最後(双方とも1=低域)を切り詰めたものであり、それ以外は平音節と促音節とで同一であることがわかる。そこで本研究では、これらを音節構造の違いによる条件異音であると解釈する。したがって、A1とDS1は同じ声調であり、B1とDL1は同じ声調であると解釈される。

表13 声調の相補分布

声調番号	調値	平音節	促音節(短母音調)	促音節(長母音調)
1	451(45)	A1	DS1'	
2	31	A2	DS2	
3	241(24)	B1		DL1
4	33	B2	DS1	DL2
5	213	C		

以上から分かるように、平音節においては、上記の5声調すべてが対立し得る。促音節においては、主核母音が長母音である場合は、2つの声調で区別されるのに対して、短母音である場合は、3つの声調が区別される。

5. おわりに

本論文は関心の対象を単独で発音された1音節語の考察に限定した。それらの素材から龍若方言の子音素および母音素を設定する証拠を得ることができたと思われる。しかし、本論文に用いた素材が1音節語に限定されたものであったために、複数音節による異音や同化に関する考察が行われていない。実際に、龍若方言では、複数音節における声調変化が見られるが、具体的にどのような変化があるのかに関しては更に詳細な検討をしなければならない。

謝辞

本研究の遂行にあたり、五十嵐陽介先生にご丁寧なご指導を頂いた。遠藤光暁先生により多数の参考資料をご提供くださり、ご助言も頂いた。記して感謝の意を表する次第

である。また、IPA の学習でお世話になった益子幸江先生、音韻論学習でお世話になった中川裕先生、参考資料をご紹介くださった吉川雅之先生にも謝辞を呈したい。

註

- (1) チワン族はタイ系民族の1つであり、現在約1700万人(中華人民共和国国家統計局編2012、31頁)の人口を擁し、中国国内最大の少数民族である。その約9割は中国の南部の広西チワン族自治区内で生活し、その他は広東省、貴州省、雲南省、湖南省など広い地域にわたって生活している。中国では「壮族」(ZhuàngZu)と呼ばれ、日本では「壮、チワン、チュワン、チョワン」など複数の表記がある。本稿では「チワン」で統一する。
- (2) この下位分類は地図中では「土語」とあるが、方言の意味である。
- (3) 天等県人民政府網 <http://www.tiandeng.gov.cn/Home/Index/detailed/id/19570>(2017年10月01日に閲覧)。
- (4) 韋・覃(1980)、覃(1996)、広西(1994)、張(1999)、広西(2008)。
- (5) Hudak(1991)pp. xvii-xviii.
- (6) 1961年8月に内部参考資料として刊行された。これは中国社会科学院少数民族言語研究所の指導の下に、広西僮族自治区民族語言文字工作委員会が1954年に58地点のチワン語を調査した結果の報告である。この資料は1994年に『壮語方言土語音系』と改名し再刊されているが、旧版の誤植も訂正している。『壮語音系匯編』の356-362頁において天等県城の麗川街の話者の音系が記述されている。本稿はこの『壮語音系匯編』に掲げられた表にある約300語に対応する龍茗方言の語形を記述する(ただし対応する語形がないものもあり、それらは除外している)。
- (7) 平音節は開音節(open syllable、母音で終わる音節)すべてと、閉音節(closed syllable、子音で終わる音節)のうち末尾に共鳴音(sonorant)を持つ音節である。中国語の文献では「舒声調」、英語の文献では“live syllable”と名付けられている。
- (8) 促音節は閉音節(closed syllable、子音で終わる音節)のうち末尾に閉鎖音(stop)を持つ音節である。中国語の文献では「塞声調」、英語の文献では“dead syllable”と名付けられている。
- (9) 広西(1994)、18-20頁。
- (10) 調値は絶対的な音の高さではなく、相対的な高さである。

参考文献

- 天等県志編纂委員会編(1991)『天等県志』广西人民出版社。
- 覃国生編著(1996)『壮語方言概論』广西民族出版社。
- 広西僮族自治区民族語言文字工作委員会・中国社会科学院少数民族言語研究所(1961)『壮語音系匯編』
(内部参考資料)、広西僮族自治区民族語言文字工作委員会・中国社会科学院少数民族言語研究所、
「天等僮音系」357-362頁。
- 広西語委研究室編(1994)『壮語方言土語音系』广西民族出版社。
- 広西壮族自治区少数民族語言文字工作委員会編(2008)『広西民族語言方音詞彙』、中央民族出版社。
- 中華人民共和国国家統計局編(2012)『中国統計年鑑』(総第31期)中国統計出版社。
- 張鈞如等(1999)『壮語方言研究』(中国少数民族語言方言研究叢書)、四川民族出版社。
- 韋慶穩・覃国生編著(1980)『壮語簡誌』民族出版社。
- 王均(1962)「僮語中の漢語借詞」中国語文雜誌社編『中国語文』1962年6月号、人民教育出版社、251-264頁。
- 王鈞 等編著(1984)『壮侗語族語言簡志』民族出版社。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編(1993)『言語大辞典』、三省堂。
- 岩佐昌(1982)「チワン語：その紹介と漢語の影響」九州大学『言語科学 17』、19-30頁。
- 吉川雅之(2017)「広西那坡県の壮語(チワン語)の一方言について」楊凱栄教授還暦記念論文集・中日言語研究論叢』朝日出版社、383-397頁。
- Hudak, Thomas John (1991), "William J. Gedney's *The Tai dialect of Lungming: glossary, texts, and translations*", Center for South and Southeast Asian Studies, University of Michigan.
- Li, Fang Kuei (1977), "A handbook of comparative Tai", Honolulu: The University of Hawaii Press.
- Pittayawat Pittayaporn (2009), "The phonology of Proto-Tai" New York: Cornell University dissertation.

(こう かいへい／博士後期課程)